

IV-122

混住化社会における住民の住み良さ感の構成に関する研究

群馬大学工学部 正 員 片田敏孝
(株)建設企画コンサルタント 谷合 哲

井上工業(株) 正 員○浅田純作

1. はじめに

都市近郊の田園地帯では、蚕食状の住宅開発が進み、農村社会から都市社会への過渡期に生じる社会状況として、いわゆる混住化社会が形成される。この混住化社会とは一般に、農家・非農家いわゆる新旧住民が混在している社会と定義されており、農村社会における都市型の生活を行う人々の混住を意味する¹⁾。そして、このような混住化社会においては、新旧住民の間に、種々の葛藤や軋轢が生じやすいコミュニティが形成されることが多く、この軋轢は住民の「地域に対する住み良さ感」に大きな影響を与えていると考えられる。

本研究では、こうした混住化社会を対象として、そこに居住する人々の地域への帰属意識によって醸成される主観的な新旧意識と地域に対する住み良さ感との関係を、社会基盤とコミュニティに対する満足度の対比により、明らかにすることを目的とする。

2. 混住化社会 —農村社会と都市社会—

混住化社会における新旧住民間の軋轢の要因は、一般的に、住民の地域社会への認識の相違や生活習慣の相違によるものと考えられている。

ここでの地域社会への認識と評価は、従来研究において、各個人が過去において属した地域社会に準拠するといわれている。すなわち、同一の地域社会に属していても新住民はかつての都市社会を準拠社会とし、旧住民は混住化以前の農村社会を準拠社会としてその地域社会を評価している^{2) 3)}。

また、地域と個人の関わり方において、旧来の農村社会では、地域固有の習慣や文化を共有する住民の総意に基づいて形成された相互扶助システムのもとで、全住民に対し均一性を要求してきた。一方で、都市社会においては行政サービスによる扶助を背景にして、住民相互が生活習慣の多様性を容認することにより、相互無干渉という一種の秩序と生活習慣が形成されてきた。

3. 住み良さ感の構成

建設工学の目指すところは、「住み良い地域の創造」にあると言われる。建設工学による「住み良い地域の創造」とは社会基盤整備によって、物理的に創造されるものであり、道路や橋、ダムや堤防、公園や下水道などを創り、便利、安全、快適であることを人々に供給することである。

農村型社会から都市型社会への変遷途中である混住化社会では社会基盤がある程度整備され、都市に居住するのとは大差のない快適な生活環境が達成されている場合が多々見受けられる。しかし、後述するが、ある混住化社会においてアンケート調査を実施したところ、同一の地域に対して住み良いと答えた者が38%、住みづらいと答えたものが20%、どちらも無いとの答えが42%であった。

この結果からも明らかなように、道路や公園の整備だけが進んでも個人がその地域を住み良いと感じるとは限らない。このことは、個人が自らが住まう地域に対して抱く住み良さ感は、居住利便性のみに基づくものではないことを示唆している。

その地域が住み良いか否かという問題は、社会基盤の整備状況がもたらす個人の生活利便性も確かに重要な要素ではあるが、個人の生活が地域社会に所属して成り立つ以上、地域社会がどのように形成され運営されているのかといったその在り方(社会システム)も重要と考えられる。

これらのことを実証するために、具体的には、住民がその地域に抱く総合的な評価(その評価を総合的満足度と呼ぶ)に対して、生活環境である社会基盤がもたらす居住利便性への評価(社会基盤満足度と呼ぶ)と、町内会や地域行事等の地域コミュニティ所属に対する評価(コミュニティ満足度と呼ぶ)が与える影響構造についての調査、分析を行う。

4. アンケート調査及び分析

4-1. アンケート調査概要

本研究では、前項の分析を前橋市に隣接した混住化地域である群馬県大胡町樋越地区を対象に行う。アンケートは、配布数400票、有効回答数343票（有効回答率85.8%）であった。主な質問項目として新旧住民意識、地域との関わり方（出役、冠婚葬祭、行事等）の実態とその評価、地域に対する満足感、社会基盤に対する満足感等である。

4-2. 住み良さの形成構造の分析

住民を主観的認識における新旧住民別グループと、年齢別グループに分類し（図-1）、それぞれのグループに対し判別分析を質的データに拡張した数量化理論Ⅱ類により分析を行う。被説明変数としては「総合的満足度」を、説明変数としては「社会基盤満足度」と「コミュニティ満足度」の2変数を用いた。その結果を表-1に示す。

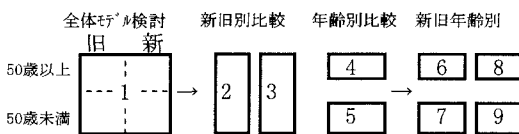


図-1：分析の枠組み

全体として、相関比は0.5前後であるが、正判別率はほとんど60%以上を示している。

内容を見ると、すべてのモデルにおいて、偏相関係数とレンジに関しては、コミュニティ満足度の方

が社会基盤満足度より大きな数値を示しており、総合的満足度に対して、コミュニティ満足度の方がより大きく影響していることが判る。

また、その影響の度合いとしては、新旧住民別モデルにおいては旧住民が、年齢別モデルにおいては50歳以上がより大きな傾向を持っているといえる。

次に新旧住民・年齢別モデルをみると、新住民50歳以上モデルにおいては、コミュニティのレンジが社会基盤のそれに対して2倍以上となっており、かつ正判別率も70%を越え、特出する結果となった。

また逆に、新住民50歳未満モデルでは、偏相関係数およびレンジについて、社会基盤とコミュニティとの差が小さく、正判別率も53%となり、社会基盤・コミュニティそれぞれが総合的満足度に与える影響の差が少ない結果となっている。

5. まとめ

本研究では、混住化社会における住民が抱く「住み良さ感」について、住民の属性別に、社会基盤とコミュニティに対する主観評価から分析検討を行った。その結果、新旧住民共通して、その地域に抱く総合的な住み良さ感に対する影響は、コミュニティに対する影響の方が、社会基盤に対する評価より大きいことが明らかになった。

従来から、岡田・杉万の提唱するコミュニティ計画学⁴⁾のようにコミュニティの重要性を論じた研究がなされてきたが、本研究においても具体的な数値解析により、コミュニティの重要性を確認する一つの実証となった。

表-1：総合的満足度の構成 分析結果

No	検討ケース	度数	偏相関係数		相関比	レンジ(範囲)		レンジ比率 社会基盤 : コミュニティ	正判別率 (%)
			社会基盤 満足度	コミュニティ 満足度		社会基盤 満足度	コミュニティ 満足度		
1	全体モデル	336	0.3909	0.4609	0.4706	1.5639	2.3584	1:1.5080	67.86
2	旧住民モデル	96	0.3084	0.4625	0.4633	1.2025	2.0726	1:1.7236	59.38
3	新住民モデル	212	0.4131	0.4705	0.4849	1.6091	2.2905	1:1.4235	67.92
4	50歳以上モデル	135	0.3672	0.5434	0.5098	1.2852	2.2149	1:1.7234	68.15
5	50歳未満モデル	171	0.4183	0.4300	0.4558	1.7675	2.2546	1:1.2756	68.42
6	旧住民50歳以上	58	0.4083	0.5614	0.4641	1.5366	2.1010	1:1.3673	63.79
7	旧住民50歳未満	38	0.3589	0.4598	0.5720	1.1787	1.7351	1:1.4720	57.89
8	新住民50歳以上	77	0.3543	0.5598	0.5577	1.1381	2.4853	1:2.1837	70.13
9	新住民50歳未満	133	0.4241	0.4578	0.4696	1.6944	2.1478	1:1.2676	53.38

【参考文献】

- 1) 富樫頌：「混住化地域における生活環境整備」農村計画学会誌，VOL.4，No. 2，PP. 35-42，1985
- 2) 石原多賀子：「来住者層の地域社会への認識と評価」二宮哲雄他編著「混住化社会とコミュニティ」お茶の水書房，1985
- 3) 小山智士：「混住化社会の住民意識について」農村計画学会誌，VOL.4，No. 2，PP. 14-25，1985
- 4) 岡田憲夫，杉万俊夫：「過疎地域の活性化に関する研究パースペクティブとその分析アプローチ」土木学会論文集，No. 562 / IV-35，15-25，1997